

# 令和四年度 第一回 中学入学試験

## 国語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

### 注意事項

1. 問題冊子と解答用紙を回収するので、両方に受験番号・氏名を記入すること。
2. この問題冊子は、14 ページあります。
3. 問題冊子や解答用紙によごれや印刷されていないところがあったら、手を挙げて試験監督かんとくを呼ぶこと。
4. 解答はすべて、解答用紙へ記入すること。

受 験 番 号			

氏 名

《一》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

それぞれ区間を走り終えて競技場まで戻ると、みんなゆったりと休憩をした。この地域に一つしかないこの競技場は、敷地内に公園もサブグラウンドもある大きなもので、至る所に芝生が植えられている。スポーツをするのにも休息を取るのにも、最適な場所だ。僕は芝の上で、一人でストレッチをした。久しぶりに出た九分台に、心も穏やかだった。

「おい、お前、そろそろ本気出せよ」

足の筋を伸ばしていると、大田が隣にどかっと座ってきた。

「え？」

大田がやってきたことにびっくりして、僕の声はうわずった。

「え？ って、もうあと十日だろ？ マジでやれよ」

「マジでって……？」

「マジで走れってこと。お前、もっともっと速かったじゃん」

そう言うと、大田は僕のスポーツ飲料を勝手に開けて飲んだ。

「もっとって言われても……」

今日はいいい記録を出せたし、自分自身のベストに近い走りだった。

「お前こんなもんじゃねえだろ。俺、陸上わかんねえからタイムのことは知らねえけど、小学校二年からお前は俺の何倍も速かったはずだ」

「さ、さあ……」

僕は首をかしげた。小学校二年で走った記憶などない。そもそも僕が走って記録を出したのは六年の駅伝だけ

で、あとは細々とした小学生生活を送っていた。

「さあとかとぼけんよ。あのころ市野小で、俺といい勝負するのお前だけだったじゃん」

大田は話の通じない僕にいらついていたが、僕もちんぷんかんぷんだった。大田となんて勝負したことがない。小学生の時から僕は**大田が怖かった**。

「あーもう、本当、お前、記憶力ゼロだな。二年生の時の全校レクリエーションで鬼ごっこしたことあっただろ？」  
② **的を射ない僕に、大田は座りなおし胡座をかい**た。

「まあ、なんか、そういうのはあったような気もする」

「そうそれ。その時俺、鬼だったんだ。俺は超最強の鬼で全員捕まえたのに、お前だけ捕まえられなかった。お前には全然追いつけなかったもんな」

僕たちの通っていた小学校は小さかったから、よく全校や学年で遊ぶレクリエーションというのがあった。もちろん僕にとってそれは楽しいものではなかった。ドッジボールをしようとかくれんぼうをしようとか、僕には敵がたくさんいて、いつだって必死で逃げるしかなかった。

「俺が全速ダッシュで追いかけるのに、お前どんどん引き離してさ。③ **手が届かなかったんだよなあ。うん、お前の走りっぷりってすごかった**」

大田は昔を懐かしむように言った。

「そ、それは本気で大田君が怖かったからだよ」

僕は④ **見当違いに褒められるのが申し訳なくて、正直に告白した**。その時の記憶はないけど、小学二年の僕にとって、追いかけてくる大田は本物の鬼以上に怖かったはずだ。

「怖い？」

「ああ、えっと、まあ、その、なんか怖いかな」

「怖いって、俺、お前に何もしたことねえじゃん」

大田は堂々と言いはなった。確かに僕は、大田に何もされたことがない。だけど、それは相手にするのが恥はずかしいほど僕が弱いからだ。

「そうだけども……でも、それは……」

「でも、何だよ」

「何って……」

「はつきり言えよな」

大田の視線が僕のほうへ動く。大田の目はいつも尖とがっている。その鋭すどさに、僕は声が出なくなってしまった。

「本当、お前って俺とまともに話そうとしねえな」

「そ、そんな……」

「まあ、お前にとっちゃ俺なんか相手になんねえだろうし、どうせ俺はお前と勝負するような場にすらいねえのかもしれないけど」

「いや……」

「でも、俺は小学二年の時からお前のことすげえライバルが現れたと思ってたんだぜ。俺、幼稚園から、鬼おにごっこでも※ドッジでも負け知らずだったのに、追いつけないやつがいるなんてさ」

大田はそう言うと、また僕のスポーツ飲料を飲んだ。

大田の言っていることがわかるのには、ずいぶん時間がかかった。大田がそんなことを思っていたなんて、想像できるわけがなかった。今横にいる大田に、返したい言葉はいくつかあった。でも、僕の中のどの思いも言葉には変換かんできなかつた。

「とにかく俺ごときに簡単に追いつかれそうなどこにいるなよな」

大田はそう言うと、よいしょと立ち上がった。榊井が集合だと言っている。

「※うぜえ、早く帰らせろよ」

大田は怒鳴りながら、みんなのほうへ向かっていった。

1区は最初からハイペースで、競技場を出たあたりで、早くも何人かが集団を抜け出した。こんなに早く勝負をかけてくるなんて。一瞬焦ったが、臆している暇はない。少しでもひるんだら、そこで負けてしまう。六位以内に絶対に入らなくてはいけないのだ。

競技場を出ると川沿いの道が続く。川のすぐそばにそびえる山の木々が、音を澄ましてくれる。静かに流れる川の音は、心地いい。大丈夫だ。僕は穏やかに響く川音に合わせるように足を進ませた。

優勝候補の加瀬南中学の選手が飛ばし、それに何人かがついていく。僕はトップを走る加瀬南中の背中だけを見た。あの背中に追いつこう。昔、大田が僕を追いかけたみたいにとどこまでも追いかけてよう。単調な道に気持ちを途切れさせないように、僕は先頭を追いかけた。

川沿いの道を抜け広い道に出ると、沿道にはたくさんさんの観客がいた。「フアイト」「がんばれ」という声がひっきりなしに聞こえてくる。市野中学の生徒や保護者もいて、僕に対する声援もあった。⑤初めて駅伝を走った時、僕は心底驚いた。この僕が、みんなから励ましやねぎらいの言葉を送られているのだ。もし僕が駅伝を走っていなかったら、陸上部に入っていなかったら、誰かに応援されることなどなかったはずだ。がんばれという言葉が、僕にはよく響く。ありきたりの言葉がありがたいということ、僕はここにいる誰よりも知っている。榊井が僕をここに連れてきてくれた。いじめられっ子だった僕を、こんな場に導いてくれた。絶対に遅れるな。絶対に先頭から離れるな。僕はみんなの声をかみしめるように、さらに力をこめた。

2キロ地点を通過し、全体のスピードが上がった。先頭集団は四人。それを追う集団は僕を含め五人。やはり

1区の手前は最後まで力が落ちない。僕以外は二年のころから1区や6区を走っていた選手ばかりだ。誰もが華々しくて際立った力がある。いや、<sup>⑥</sup>引け目を感じることもなんてない。僕は自分の腕に足に目をやった。小さいころから僕は、みんなより頭一つ大きかった。そのせいで、棒だの電柱だのとからかわれた。でも、陸上部に入つて、この身体は僕の強みだと知った。棒のように長く大きな身体は、僕を前へと進ませてくれる。

残り500メートル。みんながスパートをかけはじめ、僕もピッチを上げた。遅れるわけにはいかない。僕はずつと言われるがままに走ってきた。楽しいのかなんて感じる余裕もなく、義務のように走ってきた。だけど、今、僕を走らせているのは、義務感だけじゃない。「勝ちたくない？」駅伝練習が始まる前、榊井は僕に訊いた。勝つ、負けるということは、よくわからない。でも、この襷を大田に繋ぎたいと、誰よりも早く大田に渡したいと思つている。後ろに迫ってくる足音を振り切るように、僕は更に加速した。

「設楽、ここまで！」

最後の角を曲がると、大田の野太い声が聞こえてきた。大田はずいぶん先から僕の走りを真っ直ぐに見ている。まぶしいのだろうか、大田の目は細くしかめられている。すぐみのある大田の視線と声に、プレッシャーは極度に達した。小学校駅伝の時とは比べ物にならない重いプレッシャーだ。けれど、あの時みたいにつらくはない。この重さが心地いい。僕は残っていた力の全てをこめて、足を前へと進ませた。もう何も身体に残さなくていいのだ。全てを前に進ませる力に変えればいいのだ。僕は死に物ぐるいで走った。大田が怖いからじゃない。大田のライバルでいたいからだ。大田と同じ場に立てるやつでいたいからだ。

残り5メートル。僕は倒れこむように大田に手を伸ばした。

「お疲れ、設楽！」

大田は奪うように襷を受け取った。

「頼む」

そう言おうとしたけど、もう声を発する力すら残っていなかった。それでも大田は、「任せとけ」

と、軽く右手を上げて僕に伝えて、駆<sup>か</sup>けていった。

(瀬尾<sup>お</sup>まいこ『あと少し、もう少し』新潮文庫)

※ドッジ——ドッジボールのこと。

※うぜえ——こまこまとしていてうつとうしい、という意味の「うざったい」の乱暴な略語。

問一、——線部①とありますが、この時の僕の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、大会に向けて行った練習では自分としては満足できる良いタイムが出て、本番でもそこまで悪い結果にはならないだろうという安心した気持ち。

イ、大会までそれほど時間もない中で久しぶりの好タイムが出てしまい、調子が下り坂にならないようにという、いのりにも似た気持ち。

ウ、大会前だということにあせりやきん張感がまったくなく、この程度のタイムでも良いだろうという消極的な気持ち。

エ、大会前の練習では常に力が入りすぎてしまい好タイムにつながらないのだが、今回はじゆう実した練習のおかげでタイムが良く、自信に満ちあふれている気持ち。

オ、大会まで修正か所が多く苦しんでいたが、それらを乗りこえて良いタイムも出たので、しっかりとレース前の準備をし始められるという前向きな気持ち。



問二、——線部②とありますが、この意味を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、途中でじやますること
- イ、好ましくない行いをやめること
- ウ、急に様子が変わることに
- エ、目標からずれていること
- オ、手ごたえや張り合いのないこと

問三、——線部③とありますが、

- 1、「手が届かなかった」とは、ここではどのようなことですか。具体的に説明しなさい。
- 2、このとき大田は僕のことをどのような存在だと思いましたか。文中から五字以内でぬき出しなさい。

問四、——線部④とはどういうことですか。文中の言葉を用いて具体的に説明しなさい。

問五、——線部⑤とありますが、それはなぜですか。その理由を三十字以内で説明しなさい。

問六、——線部⑥とは、ここではどういうことですか。最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、自分は他の選手よりも実力が無いと思うこと
- イ、レース終盤に気力がなくなってしまうこと
- ウ、前を走る選手に引つ張られてやる気がでること
- エ、先頭集団から遅れてあせること
- オ、身体の大きさをはずかしがること

問七、——線部⑦とありますが、この時の僕の気持ちを説明しているものとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、無事に自分の区間を走り終え、大田のプレッシャーから解放されて安心している。
- イ、大田のあこがれの存在として、精一杯走らなければならないという責任を感じている。
- ウ、すごみのある声で襷を要求する大田に、誰よりも早く渡せて満足している。
- エ、大田に認められる存在でいたいと全力を出し切り、襷を繋げてじゆう実した気持ちになっている。
- オ、襷を繋ぐために死に物ぐるいで走り切り、声を出すことさえめんどろに思っている。

問八、次のア～オのうち、本文の内容と合っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア、大田は早く走れるようにひたすら考える頭脳派だった。

イ、大田の話が下手なのでいつも言いたいことがよく分からない。

ウ、僕はこの大会の前までは言われるがまま義務のように走ってきた。

エ、僕にとっては中学校の駅伝大会のプレッシャーがいい記録に結びついた。

オ、僕は大田のすすめで駅伝をはじめた。

問九、あなたは褒められることとしかられることでは、どちらが人を成長させると思いますか。自分の体験をふまえてその理由も答えなさい。

《二》 次の 1 ～ 5 の —— 線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1、糸をソめる。
- 2、東京駅をケイユする。
- 3、キズが治る。
- 4、開会式でコツキをかかげる。
- 5、力を合わせてナンキョクを乗り切る。

《三》 次の 1 ～ 5 の —— 線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- 1、山の頂に立つ。
- 2、水が蒸発する。
- 3、一步退く。
- 4、期間が延びる。
- 5、服装を整える。

《四》次の1～4の（ ）に適切な漢字を入れてことわざを完成させなさい。またその意味を後のA～Eの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1、（ ） 羽の矢が立つ
- 2、（ ） 菜に塩をふる
- 3、へそで（ ） をわかす
- 4、時は（ ） なり

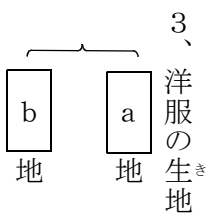
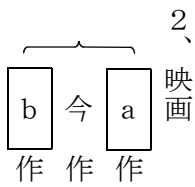
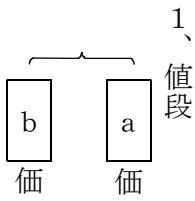
- |  |
|--|
| <p>A、おかしくてたまらないこと。<br/>B、人が力なくしよげるさま。<br/>C、家の中央にあつて、最初に建てるもの。<br/>D、時間は大変貴重であり、むだにいやしてはいけないこと。<br/>E、多くの人の中から特別に選び出されること。</p> |
|--|

《五》次の1～5の（ ）にあてはまる言葉として最もふさわしいものを後のア～カの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし同じものは二度使えません。

- 1、このプリントをわたしておくね。（ ） 明日の予定はどうなっているの。
- 2、今日はがんばった。（ ） 自分で自分をほめたい。
- 3、あの人は私の母の兄、（ ） おじです。
- 4、今日のおやつは、クッキー（ ） チョコレートから選べます。
- 5、雑誌のプレゼントに応募した。（ ） 当たらなかった。

- ア、つまり           イ、しかし           ウ、または  
 エ、だから           オ、さらに           カ、ところで

《六》次の1～3の語に関する対義語になるように [ a ] ・ [ b ] の中に漢字一字を入れなさい。



《七》 次の1～4について、例にならって漢字や送りがなの誤りをそれぞれぬき出し、正しく直しなさい。

(例) 去年の夏は熱かった。(熱かった ↓ 暑かった)

- 1、講演の内容を短かくまとめる。
- 2、コップの水の体積を量る。
- 3、中学生らしく態度を新ためる。
- 4、最後までしっかりと責任を持って点検する。

